



**Data**

監督：本木克英  
原作：池井戸潤『空飛ぶタイヤ』（講談社文庫／実業之日本社文庫）  
脚本：林民夫  
出演：長瀬智也／ディーン・フジオカ／高橋一生／深田恭子／寺脇康文／小池栄子／阿部顕嵐／ムロツヨシ／中村蒼  
笹野高史／岸辺一徳／柄本明／佐々木蔵之介／六角精児／大倉孝二／津田寛治

## 👁️👁️ みどころ

池井戸潤の原作がはじめて映画化！そのネタは！「三菱自動車リコール隠し事件」だが、「半沢直樹」と同じように今ドキホントに大企業内の若手社員による内部反乱がありうるの？

わかりやすい展開はテレビドラマとしては上出来だが、映画としての問題提起性や芸術性は如何に？その点が、私にはイマイチだが・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■池井戸潤の原作がはじめて映画化！■□■

『空飛ぶタイヤ』とは何ともショッキングなタイトルだが、これは近時『半沢直樹』や『民王』等が次々とテレビドラマ化されてきた、人気作家池井戸潤の人気小説。同作も2009年にWOWWOWでテレビドラマ化されたが、意外にも池井戸潤小説の映画化は本作がはじめてらしい。

「半沢直樹」を面白くテレビドラマで鑑賞した私が思うに、それは、池井戸潤の小説はテレビドラマとしては面白いが、映画化にはあまり適していないため・・・？本作を観て、正直そんな感想をさらに強くすることに・・・。本作の監督は本木克英だが、多分彼もテレビドラマの演出には向いていても、映画監督にはあまり向いていないのでは・・・？本作を観て、その感も強くしたが・・・。

### ■□■原因は整備不良？構造上の欠陥では！■□■

赤松運送の運転手がトレーラーを運転中、その左前タイヤが突然はずれ、これが左前方の歩道を歩いていた母子連れの母親を直撃。母親は即死したが、これは車両の整備不良に

よるもの。警察もトレーラーの製造元であるホープ自動車もそう結論づけたため、赤松運送は窮地に。しかし、若き社長・赤松徳郎（長瀬智也）が調べたところでは車両の整備に不十分な点はなかったから、ひょっとしてこれは整備不良ではなく、車両の構造上の欠陥によるもの・・・？

そんな疑惑を深めた彼はその解明のための努力を続けたが、ホープ自動車のカスタマー戦略課課長の沢田悠太（ディーン・フジオカ）がそれを全く取り合ってくれなかったのは当然だ。そもそも一介の運送業者が、トヨタ、ニッサン、ホンダ、三菱自動車等の大手自動車メーカーが製造した車両に構造上の欠陥があるなどと文句をつけても、それが通用しないのは日本の常識。もちろん、それは赤松にもわかっているのだが・・・。

## ■□■メーカーや銀行の若手社員が内部反乱を？■□■

そんな赤松運送側からのアプローチに対して、本作では、遅まきながら少しずつホープ自動車の内部体制に疑問を持ち始めた沢田や、ホープ自動車の経営の在り方に疑問を持ち始めた、メインバンクたるホープ銀行の本店営業本部の井崎一光（高橋一生）たちの「内部反乱」の様子が描かれていく。彼らこそ「半沢直樹」と同じような、大企業内のサラリーマンでありながら、勇気と行動力にあふれた一種理想的な人物像。そのため、今ドキの若者は彼らのそんな姿に惹かれるのだろう。

本作ではそこに、少し言葉づかいは悪いが人間味にあふれた情熱的な中小企業の若社長赤松がメインとして加わるから、池井戸潤の原作は若者たちの人気を集めたのだろう。他方、沢田や井崎たちの動きの起爆剤になるのが、週刊潮流記者の榎本優子（小池栄子）、悪役は岸部一徳演ずるホープ自動車の常務取締役・狩野威だ。また、本作ラストに決定的な変化をもたらすのは港北中央署刑事の高幡真治（寺脇康文）たちだ。

なるほど、そんな組織構造と人物構造がわかりやすいから、池井戸潤の原作は2時間のテレビドラマに収めるにはちょうどいいネタかもしれない。本作を観ていると、その展開がよくわかる。しかし、それって映画なの？また芸術なの？

## ■□■三菱自動車リコール隠し事件の重さは？その教訓は？■□■

三菱自動車による「三菱リコール隠し事件」とは、1977年から約23年間にわたって10車種以上、乗用車系で6件約45万9000台、大型・中型トラックで3件約5万5000台、計18件約69万台にのぼるリコールにつながる重要不具合情報（クレーム）を、運輸省（現・国土交通省）へ報告せず、社内で隠匿しているもの。これは、2000年6月に三菱自動車社員による匿名の内部告発による通報で発覚した。ここから、現在大流行の「コンプライアンス」という言葉が生まれたわけだが、そもそも自動車のリコールとは一体ナニ？なぜそんなことが起きるの？その防止策は？三菱自動車以外の実例は？

私は弁護士としてそれを一生懸命勉強してきたが、本作のような形でリコール問題が薄

っぺらな人間ドラマ、社会ドラマ化されることが少し心配だ。「空飛ぶタイヤ」の原因が大手自動車メーカーが製造したトラックの構造上の欠陥にあることを、一民間企業がどうやって立証し、どうやって告発することができるの？問題の本質は何よりもその難しさにある。しかして、本作はそれを大きなテーマにしているものの、私にはどう見ても2時間のドラマに収めるためのストーリー構成のテクニックが先だっているような感じに・・・。  
ちなみに、本作のプレスシートには「三菱リコール隠し事件」をネタにしていることは一切触れられていないが、これはひょっとして日本の大手自動車メーカーの意思を「忖度」したため・・・？

2018（平成30）年5月10日記